

—巻頭エッセイ—

研究における“ヒマ”と“ムダ”について

松久幸敬¹⁾

日本の社会では、“ヒマ”と“ムダ”は悪徳である。いいかえれば、勤勉と効率が美德で、我が国は、このような価値観をいわば国是のようにして、アメリカやヨーロッパの先進国に追いつけ追い越せを目標にやってきて、一応その目標を達成したかにみえる。追いつく目標がなくなってみると、科学技術の分野では、これからは世界をリードする独創的、創造的な研究をしなければならない、と言われた。そして今度は、独創的研究をするために、勤勉に、効率よく、つまりヒマを排除し、ムダを省いて努力することになったのである。

ところで、勤勉な常識人からみると、研究とは不思議な世界である。研究とは、そもそもヒマとムダを要求するものだからである。私が地質調査所に入った頃、論文を書いて雑誌に投稿したりしているとよく言われたものである。「あいつはヒマだから論文など書いている。自分たちだってヒマがあれば論文などいつでも書ける。自分たちはそんなヒマなどなく、もっと大事な仕事で日々忙しいのだ」と。当時地質調査所では、論文を書くことは悪徳であったのである。ヒマがあればいつでも論文を書けるかどうかはともかくとして、研究にはヒマが必要であるという点では彼等の認識は正しかったと思う。世界的に皆が取り組んでいる研究でも個人的な研究でもそうであるが、何かブレイクスルーを試みるには、日夜ひたすらそのことばかり考えると、逆にひとまずそれから離れて全く別のことにとりかかってみるとか、そういった気ままなことが出来る環境が必要である。ところが、綿密な計画にそった勤勉な研究環境では、研究はすべて計画どおりに進み、計画どおりの結果が報告され、結局はブレイクスルーは生まれてこない。また、大量のお金が注ぎ込まれる環境でも、しばしば人々はお金のために忙しくなって、ひとつのことを考え続けるヒマがなくなるので、このような環

境も独創的な研究をするにはふさわしくない。最近では、プロジェクト研究で皆忙しい。しかし、一見はなやかにみえる日々の中で、研究にとって大切なヒマを失ってしまっているようである。

一方、スポンサー（国立研究所であれば納税者）にしてみれば、金銭的にも時間的にもなるべくムダを省いて役に立つ成果をあげさせようとするのは当然である。また、スポンサーの意を汲んで監督にあたるマネージャー（行政官）たちも、一層そのように考える。ところが、研究とは実に効率の悪いものである。独創性とは、今まで誰も考えなかったことを考えたり、今までになかったことや不可能だったことを実現することであるから、そこに至るには様々な紆余曲折や失敗がつきものである。決して効率よくはいかないのである。お金を預かる者としては、その研究をどれだけ重視しているかはどれだけお金を注ぎ込むかで表現するものであろう。国としてビッグプロジェクトにお金を注ぎ込むのも当然である。しかし、困ったことに、研究はお金を注ぎ込んだからそれだけ成果が上がるというものでもない。そうだからといってお金は無いほうがよいというわけでもない。研究においては、お金と成果の関係はストレートではないということである。

このように書いてくると、ぼんやりと訳のわからないことをやっている研究でも、ムダも必要だとか、そのうち成果が出るかもしれないということで正当化する根拠を与えているように誤解されそうだが、小文は、効率だけをよしとするやり方では独創的研究は育たないと言っているのだから、ムダな研究を奨励しているわけではない。ただ、ムダな研究と意味のある研究は、必ずしもいつもははっきりしている訳ではないところに判断の難しさがある。我々現場監督（研究管理者）は、効率とムダの間に立って、研究の本質を守る努力をしなければならないのである。

1) 地質調査所 地殻化学部

キーワード：研究、ヒマ、ムダ